

晩学の光芒

北野昭彦

和田繁二郎先生はつねづね、「ぼくは蒲柳の質だから」とおっしゃり、健康に人一倍留意しておられた。「一病息災」とはよくいわれるが、先生は二病息災であつたかもしれない。はじめてお目にかかったのは先生が四十一歳のとき（当時、立命館大学助教）であつたが、そのころには既に煙草をやめておられた。

それから三十年後、といえば先生の古稀のお祝いをした翌年だが、私は大谷女子大学助教として、和田先生の大谷女子大学時代の、最後の三年間を一緒に過ごさせていただいた。そのころの和田先生は、猛暑の夏でも冷房した車内で体を冷やさないように、つねに上着を用意しておられた。だからこそ私たちは、先生の傘寿のお祝いをするのできたのであろう。

けれど、和田先生のように、傘寿をすぎても意志と情熱と想像力を失わず、つねに新しい研究テーマを追求され、また現役歌人として新しい表現世界を切り開いておられた方には、何歳まで生きても己が人生を全うしたということはないのであろう。

今年の四月十一日のことであつた。昨春から龍谷大学へ転動した私は、近況をご報告かたがた、東若宮町のお宅へ伺つた。いっお目にかかってもお元氣であつた先生が、その日は少し弱つてお

られるように見えた。そのとき先生は、小室信介（案外堂）のことをもつと書きたいといわれ、また単行本未収録論文を補筆して著書にまとめたいと楽しそうに語っておられた。が、ふと口を閉ざされ、やや間をおいてから、

「ぼくより年上の白川君（白川静先生）が、益々元氣で、これから著作集を出すといつてゐる。ぼくも負けずに頑張りたいが、もうその体力がなくなつた。白川君にはとてもかなわない」とおっしゃつた。まるで己が最期を予感したような話され方だつた。私は、「そんな氣弱なことをおっしゃらずに、さつきお話になつた構想をせひ実現してください。」と申し上げるよりほかに言葉はなかつた。同時に私は、親友の白川先生の存在の大きさをあらためて実感した。常に「和田君」を学問の上でリードし、激励し、深い理解を示してくれる「白川君」の存在は、和田先生の大きな励みであり、先生をして生涯現役の歌人・研究者たらしめた要因の一つであつたにちがいない。

まだ四十歳代のころの白川先生と和田先生を、私は存じあげてゐる。だから、その後お会いすることに、あの四十歳代のころの面影と比べていた。両先生は年ごとに若かりしころより更に頭腦

が明晰に冴え、明快な文学論を展開するようになられた。

そのことを強く実感したのは数年前、三宅八幡宮に建立された和田先生の歌碑の除幕式のときだった。最初に祝辞を述べられたのは白川先生である。「和田君の詩精神は——」で始まり、短歌の抒情を超える写実と象徴の合一をめざす作風を讃えたその祝辞は、堂々たる芸術論であり、白川先生に大詩人の面影があった。

また和田先生の謝辞のなかにも、これと呼応する芸術論が織り込まれていた。そのとき私も祝辞を述べて、心理学のセオリーを超えた和田先生の若々しい詩精神を讃えたように記憶している。

心理学によれば、人の思考力と年齢との相関性には個人差があり、中年を過ぎれば減退する人もあれば、七十歳を過ぎててもなお思考力が上昇する人もあるという。このセオリーによれば、和田先生は後者を代表する人だという説明が可能である。

けれど、想像力に関する心理学のセオリーは冷酷である。心理学事典には、「生産的想像力は一般の精神発達線の線にそって発達し、青年期を頂点として、その後は年齢の増加とともに想像力の減退を示す」とある。若いころには研究論文を驚異的に量産した学者が、六十歳前後から急に筆が進まなくなる例は多い。その原因は思考力の衰えだけではない。想像力の枯渇によって頭が固くなり、固定観念に支配されて、柔軟な思考も新しい発想もできなくなるからである。

ところが和田先生には、「青年期を頂点として、その後は年齢の増加とともに想像力の減退を示す」という心理学のセオリーは

通用しなかった。短歌の創作が想像力の減退に歯止めをかけた。その上、七十歳を過ぎてなお上昇する思考力。この両面相俟って先生は生涯、現役歌人・研究者であり続けられたと思う。

和田先生は晩学であった。しかも、先生は元来、中世文学の研究者であった。近代文学研究に着手されたのは助教時代からである。そのころの先生に、私は学生として出会ったのである。以来、大学院時代をへて長いおつきあいである。思い出も多い。

和田先生の監修で『日本の近代文学』（同朋舎、一九八三）と『近代文学の知識人像』（ミネルヴァ書房、一九八七）を共著出版したときには、全体を束ねるために安易な妥協を許さぬ和田先生の厳しい一面と、包容力のあるところを同時にみた。

一九八三年から四年間、和田先生のお宅で定期的に開いた「広津柳浪研究会」は、気心の知れた仲間との和気あいあいの雰囲気の中でさまざまな困難に立ち向かい、わずかながら共同研究の成果を世に問うことができたと思うが、私たちの多忙ゆえに四年間で挫折した。和田先生には「小川未明研究会」の構想もあり、私も乗り気だったのだが、実現しなかった。今となってはどちらも心残りである。

すでに古典文学研究者として研究主体を確立してから近代文学研究に着手された和田先生の内には、つねに根源的な問いかけがあった。近代文学を近代文学たらしめている「近代性」とは何かという問いもその一つであった。「近代性」の問題に限らず、先生はつねに根源的な問いかけを重視された。私は学部三回生ゼミ

から大学院時代にかけて、その影響を強くうけた。和田先生から私への問いかけは、本質的、根源的な問いかけばかりであった。最も忘れたいのは、次のような問いかけだった。

「北野君。君はキリスト教会の牧師である植村正久が、国木田独歩にワーズワスの詩精神を教えたというのかね。それなら、二人にとって信仰と文学との関係はどうなっているのかね。事象だけではなく、事象の確認をとおして、宗教と文学、信仰と文学表現という本質的な問題へと論及すべきではないかね。」

当時の私はこの問いに答えられなかった。私が私なりにその答えを出したのは、それから二十余年後、和田繁二郎博士古稀記念論集『日本文学・伝統と近代』（和泉書院・一九八三）に掲載した、「植村正久と独歩——その文学上の接点」である。

中世文学の研究者であった和田先生が近代文学研究に着手されたときの、最初の著書が『日本文学史・近代』（法律文化社）であったことは驚異的なことである。文学史なんて、そう簡単に書けるものではない。これは私自身が近代文学史の明治期を四度ほど分担執筆しての実感である。文学史も歴史であるからには、つねに書き替えなければならない。現在の文学状況をふまえた今日の視点から、そのつど過去の全体を捉え直さなければならぬ。だから過去に読んだ作品を、そのつど読み直さなければ執筆できない。私は「文学史」を執筆することに四十歳ごろの和田先生の心中を追体験しているような心境になったのである。

和田先生が中世文学から近世文学をとばして近代文学研究へと

進まれたとき、はじめに着手されたのが、中古・中世の説話や近世の戯作者を題材にして鋭い近代精神を盛り込んだ、芥川文学の研究であったのは納得できる。また、歌人和田周三でもある先生が、詩歌のジャンルではじめに着手された研究対象が、浪漫的憧憬と短歌的抒情と、鋭い批評精神と思想的相剋を内にかかえて明治を駆けぬけた啄木であったことも、今の私にはよくわかる。

さらに、中世文学研究から近代文学研究へと一足飛びに進まれた先生が、やがて近世から近代への変革期の様相に注目され、それまで近代文学研究者があまり踏み入らなかつた明治初期文学の研究へ、踏みこんでいかれたのも、必然の道筋に思える。

こうして先生は、芥川文学の研究は勿論、明治前期文学の研究において研究史に残る大きな業績を残されたのである。

和田先生といえは、「白川君」「和田君」と呼びあつておられた白川先生のことと同時に目にうかぶ。白川先生には和田先生のおんまで長生きして益々よい仕事をしていただきたいと思う。

和田先生ご夫妻は、私の書いたエッセイも愛読して下さった。先生のお宅へ伺うたびに、先生と奥様から交互に的確なコメントをいただいた。そのたびに「和田先生は、いい奥様に恵まれたかただ」と思った。だから私はこれからも、自分のエッセイを奥様をとおして先生の御霊前に捧げたい。

（きたの・あきひこ 龍谷大学教授）